

市政研究所だより No. 18

豊中市政研究所 TIMR (The Toyonaka Institute for Municipal Research)
〒561-0802 大阪府豊中市首根東町3-7-1
TEL:06(6862)2290 FAX:06(6862)2292
ホームページ: <http://www.tctt.zaq.ne.jp/timr> E-mail: timr@tctt.zaq.ne.jp



MENU

特集 研究所を研究しました ...	1~2
研究所の四季 ...	3
研究日誌 ...	4
出島・入島 企画調整室から ...	5
理事会ダイジェスト ...	5
事務局から ...	6

研究所を研究しました・・・いままでを振り返って

豊中市政研究所も今年で6年目を迎えました。多くの期待を背負い設立された研究所ですが、もっともっと市民や職員のみなさんの期待に応えなければと自問しています。そこで、研究所のありのままを研究(現状把握、分析、今後の展望)してみました。

ここでの研究は自らが行ったものですので、みなさんから見た研究所を研究していただきたいと思っています。

自問1 いま、何をしているのか？

今年度のメニューを決めたところです。

今年度の研究所の取り組みが、6月24日に開いた理事会で決まりました。自主研究は、「廃棄物行政における市民参画の検討」を村上研究員が、「孤独死を回避するための福祉システムの構築」を弘中研究員が、「都市交通から見た豊中の将来像」を土井研究員が担当して取組みます。また、機関誌は「子どもを

とりまく環境」、講演会(シンポジウム)は「子育て環境から考える豊中市の魅力」と、子どもをテーマに取り組みほか、新しい試みとして、「ワークショップ・市政研究ことはじめ」を開き、市民と一緒に研究活動について考えます。

自問2 何を問題にしているのか？

6年目の振り返りと今後の方向を考え中です

研究所もスタート以来6年目、新しく脱皮すべき時期を迎えています。現在、これまでの経験や積み重ねを振り返り、できたこと、できなかったことなどの整理と今後の方向づけの議論を進めています。研究所のメイン事業である自主研究を例に議論を紹介します。これまで、市から派遣された職員が研究員として、大学などの研究者、関係する市のセクションの職員等で研究会をつくり10数本の研究報告を実績として蓄積してきた。また、こうした成果は市民や職員向けのセミナーの場や、市の政策検討委員会で報告してきました。けれども、その半面、研

究員が3年サイクルで交替する仕組みや、研究活動については素人の研究員が調査や研究ノウハウの把握に苦心するといった問題を抱えています。そのため、折角の成果が研究員の中に留まっていて市の各職場や市民に十分フィードバックできていないという現状があります。こうした問題の解決を図ると共に、研究所の設立目標に沿って、研究ノウハウや成果の生かし方などが蓄積していく仕組みをつくること、また活動を評価するための枠組みや実践的目標をクリアーにすることなどに議論が集中しているところ。

自問3 考えるだけで動かないのか？

市民と共に進める研究活動の場を探ります

新しい試み「ワークショップ・市政研究ことはじめ」は、研究所が目標としてきた「市民に開かれた調査研究機関」を、市民や研究者とともに実現していく手始めとして企画しました。「協働とパートナーシップ」がまちづくりのキーワードになっていますが、地域の問題や課題を発見し、解決策を考え、実

行可能な道筋や手順をつくるためには、市民も職員も新しい知識や創造的な議論の場をセットしていく力を身につけることが必要です。市民が研究活動とおして市政に参画していくことや、その際に研究所がどんな役割を果たせばいいのかを、この取り組みを通して明らかにしたいと考えています。

自問4 考えていることをどう実行するのか？

今年から来年にかけてのスタンスで説明します

先程、今後の研究所「脱皮」の方向について考え中と紹介しました。これを「研究所改革」と名づけた取り組みとして、秋までには骨組みとなる考えや目標を整理し、来年度に実施することやそれ以降に向け準備することなどを決めていきます。改革を見据えながら今年の研究スタンスを説明しますと、

「豊中で今起きていることを明らかにし、一方で、やがて将来起きるかもしれないことを見通したり、両者の関わりを多角的に検討し、効果的な提案に結び付ける」と、多少最大公約数的な表現ですが、こんなスタンスで、研究活動を進めたいと考えています。

自問5 で、具体的にはどうするのか？

三つの自主研究を研究スタイルの違いで言わせてください

研究スタンスを分解しますと、「今起きていること」は、事実情報を集め分析・整理し、いろんな考え方から議論し、問題と課題を明らかにすることになります。「孤独死」と「都市交通」の問題は、まず、豊中での問題の実態や課題の把握からスタートします。この2つのテーマは、さらに「将来起きるかもしれないこと」として、不安感や期待感、さらに問題先進地での取り組み事例などを調べる必要があります。この他、市の施策も含め現状のままでもいくと将来どうなるのかについて、「経験則」「推計」などの研究手法を生かした集約や整理の議論も必要です。「廃棄物行政」の問題は、一昨・昨年と比べて、こ

うした流れで取組んできて浮き彫りになった「希薄な近所付き合い」「集合住宅での管理人の役割」など、豊中市に特徴的なポイントを整理し、多様化する市民が廃棄物行政に参画するための「効果的な提案に結び付ける」ことを目指します。「孤独死」の問題は単年度研究ですが、実行可能な回避策などを提案することを目標としています。「都市交通」は、今年を三年間かけた研究のための勉強会として位置付けています。研究スタンスで表現した各要素を深めることと合わせて、一地方自治体がどこまでこの問題に迫れるかを明らかにする挑戦という意気込みで取組みたいと考えています。

自問6 ところで、市政研究所はどう見られているのか？

問いかけ～こうした現状を含め研究所をどのように思いますか？

今年度の取り組みを中心に研究所で話し合っていることや、今年から変えていく要素を紹介しました。市政研究は、この研究所だけの力では前に進まないことばかりです。これを読まれた方々と共に考えな

がら、変えていきたいと思います。率直なご意見をお聞きかせください。電話、ファックス、メール、立ち話等々研究所事務局メンバーは、いつでもスタンバイしていますのでよろしく願います。

今号休載のコラム TOOL BOX に代えて話題提供をひとつ。「出島・入島」です。豊中のアムネスティグループが京大の間宮陽介さんを招いた勉強会で聞いた話です。「江戸時代に長崎に作られた出島は、当時の鎖国社会が異国文化を取り入れる役割を果たした。各地にある港は、明治以降まで外に閉ざされていたが、脱亜入欧の下、外国船が訪れる地域では港が外国文化に対する開口部という役割を果たした。出島のように外に作るのではなく、内に入る玄関口として作ったわけだ。」内部領域と外部領域の接点のあり方とスタイルの話です。間宮さんは、この話に続けて、「わが国には政治・行政・経済・文化など様々な分野が領域として境界を持ち、さらにその領域の中でまた組織・地域・役割など無数の領域と境界がある。その領域間の相互交流を進めるために境界をフリーにすることが注目されがちだが、それぞれの領

域がツリー状に支配されていることも重視すべきだ」と指摘され、「各領域の価値観や制度が上から縦割り各領域をコントロールしているので水平的な交流・協力を阻んでいる。出島や開口部を各領域間に作る事が現場の努力次第という現状に対して、それを解きほぐす論理を考えている」と話されました。「入島」は私がこの話の後で思いついた表現です。最近、豊中市の各分野で「出前方式や公募方式」が取られています。行政から見れば、「出島・入島」の試みと言えます。一方、市民の側から見ると話は逆転し、「公募方式」は市民側の出島が市役所の中に作られ、「出前方式」は市民や地域にとっての入島・開口部となります。研究所が市役所の出島なのか、市民や地域社会にとっての開口部なのか、この2つの役割を対立させずに双方から充実していく結節点となるよう努めねばと考えています。(平尾)

研究所での3年間をふりかえって

総務部法制文書課市史編纂係 太原 敏

平成11年4月から13年3月までの3年間を研究所で過ごし、3本の自主研究、千里ニュータウン再生に関する共同研究、機関誌の編集発行、講座、講演会やセミナーの開催、大学院派遣研修など様々な経験をする機会に恵まれました。今回の研究所を卒業するにあたり、この3年間をふりかえって色々感じることを綴ってみました。

【研究内容について】

ここでは自主研究についてふりかえってみたいと思います。

1999年度「豊中市における公共建築物のライフサイクルコストの研究」 - 計画的・効率的な行財政運営を目指して -

2000年度「IT産業振興“とよなかモデル”」 - 税収の安定確保に向けて -

2001年度「市民公益活動を促進する条例の類型比較」 - 地域コミュニティ再生のために -

1年目 - 歳出削減、2年目 - 歳入確保と主に財政面を中心にした研究が続きましたが、3年目は地域コミュニティの再生問題を取り上げました。実はこのテーマも、地域の公共サービスを地域で担っても

らうことにより、しなやかな行政サービスが提供され、公益の増進につながるとともに、行政コスト削減にもつながるとい側面を含んでいます。

3年間の研究を一言でまとめるとすれば、「今後とも持続的に公共サービスを提供するために行政、市民などが取り組まなければならないことを、行財政改革、公民の役割分担・協働の視点から検討、提言した」といえましょう。これからはますます市民・NPO・行政・企業がいろいろと知恵を出し合っていないと良質な公共サービスを提供できないと思います。市政研究所は、これらの協働のコーディネーター役としても期待されるようになって感じています。

【研究環境について】

研究員には大型の机、ロッカー、ノートパソコン完備の研究ブースが用意され、自席からインターネットでの情報収集、印刷、メールのやりとり、研究報告書の作成などができるとい非常に恵まれた環境で研究することができました。文献、書籍、資料も充実してきています。今後は、ソフト面での充実、

例えば研究方法のノウハウなどを身につけさせる研究員養成カリキュラムの導入、研究体制を強化するために研究所の将来を見据えることのできる主任研究員、研究部長の配置などが課題であると感じました。

【大学院について】

2000年4月から2002年3月までの2年間、大学院派遣研修制度により大阪大学大学院国際公共政策研究科において経済学やNPOと行政の役割分担などのテーマで研究する機会を得ました。教官、院生や

実務者など多くの方々との交流を通じ、自分の視野を広げることができたことは、本当に得難い経験でした。大学院派遣研修は大変ですがおすすめです。

【そして研究所を育てるために】

全国的に市の外郭団体として研究所がある市はそう多くはありません。地方分権により市レベルの独自の政策立案能力が問われる中、市本体ではできにくい研究を失敗をおそれずに思い切って取り組むところに研究所の存在意義の一つがあるのではないのでしょうか。職員もせつかく市政研究所という貴重な資源があるのですから、資料を調べに行く、研究員

と意見を戦わせるなど、積極的に活用してほしいと思います。私も、今後は研究所と市との架け橋の役を担っていこうと思います。これからも行政や市民にいろんな問題提起をしてほしいと思っています。

みなさまの今後の活躍を期待します。私も、「あいづには3年間、無駄飯を食わしてしもた！」と言われないようがんばりたいと思います。

「あたりまえ」の再検討 村上 馨

平成12・13年度で行ったアンケート調査で「ごみ収集を有料化すれば全体のごみ量が減る」という設問を設けたところ、意見が「賛成」「反対」「どちらともいえない」にほぼ3分されました。「反対」の理由は「税金を払っているのだから、市が当然行うべきサービスのごみ処理にお金を払うのはおかしい」というものがほとんどでした。

昭和17年から42年まで、豊中市の一般家庭ごみの収集は有料でした。その後無料収集が続いていますが、今後どうなるのでしょうか。有料化導入によって、ごみ減量に成功している自治体があります。大抵の場合、有料指定ごみ袋での排出を義務

付ける方法を取っています。不法投棄防止のため、北九州市では指定外のごみ袋の中身を公開したこともあるそうです。有料化が現在の豊中市に馴染むかどうかについては、市民と行政の間で議論があつてしかるべきです。有料化の理由は、かつては財源の確保でしたが、現在はごみ減量による最終処分場延命や地球資源の確保に変わり、市民はその必要性を実感しづらくなっています。

ごみ収集の有料化を例に挙げましたが、現在は市民や行政が「あたりまえ」と考えてきたものを再検討する転換点に直面している課題が数多くあるのではないのでしょうか。

計画を立てる 弘中 伸明

今年度の自主研究のテーマを「(仮)孤独死を回避するための福祉システムの構築について」とし、現在、資料集めや研究全体の枠組み、今年度末までのスケジュールを作り取り組んでいます。昨年度の研究では研究全体の枠組みのところで躓いて、結局満足のいく研究ができなかったことを反省材料に同じ轍を踏まないようにと思っています。

しかし、自分で枠組みを作り計画を立ててこなしていく経験というと、遠い遠い昔の中学生時代に定期テストの一週間前に当日までの勉強時間の割り振りを親に言われて仕方なく作ったことくらいしか思い出せません。市役所にいるときにまったくできなかったといえば、私はまったく仕事をしませんでしたということになるので、多少はしたと

いうことにしますが、定期テストにしても市役所の時に自分がしていた仕事にしても、小さい頃にやった塗り絵のように画用紙にあらかじめ薄く下絵が描かれていてそれからはみ出さないように色を付けていくという作業が中心で、画用紙の材質や大きさから自分で決めていくという研究所での仕事のノウハウがなくあれこれ悩んで前に進まないことが多い毎日です。

いままでのつけの大きさや自分の能力のなさを嘆くばかりでは仕方ないので、今の自分自身のポテンシャルをできるだけ冷静に見極めた上で、様々な人に教えてもらいながら現実的な計画を立てたいと思っています。

公募制度を体験して 土井 博司

「落ちた！」40分の面接が終わった瞬間の自己採点結果でした。面接を受けるまでに何度も、頭の中で自分の研究ポイントを整理してきたつもりでしたが、秘書課第2応接室に入室した緊張の高まりの上に4人の面接官が自分の目の前にいらっしゃる状態で、いつになく動揺し、思考回路が完全に壊れた状態で面接を受けました。

そんな状況の中で一番答えに困ったのは「最近読んだ本で感銘を受けたものは。」という質問でした。頭の中では、研究計画書をまとめるために読んだ本が、全く思い出せなく今になっても何で出てこなかったんだろうと悔しい思いを持っています。

そのような状況でしたが、日々の執務や業務では体験することのない面接という非常に緊張感のある場に自ら飛び込んでみての反省点を上げますと、質問は予想外の角度からされるので、説明のための具体的な事例収集に努めるべきでした。これは説得力があります。そして、どんな問題、課題でも「豊中」を忘れてはいけないこと。最も重要な要素と思います。どうしても参考文献の知識に引っ張られて稀薄になります。やっぱりコレです。さて、結果は採用されました。どんな状況でも自分の伝えたいことをいかに正確に説明し、伝えるかという当たり前の大切さを痛感しました。

出島・入島 研究所と市役所の交流ひろば

今年度は企画調整室と「政策研究」をKEY WORDに交流します。

地域独自の政策形成を目指して 政策推進部企画調整室長 奥田至蔵

本格的な地方分権時代を迎え、地方自治体の政策展開においては、自主性・自立性がこれまで以上に求められています。市職員はもとより、市民の方々も地域の政策形成に積極的に参画していただきながら共に豊中の将来像について、各方面から政策提案できるようなしくみの必要性がますます高まってきています。

豊中市政研究所は、豊中における都市問題の中・長期的課題について調査研究を行う研究機関として、これまでその実績が蓄積されてきました。そして今、地域独自の政策形成が問われている中で、豊中市政研究所が核になり、多くの市民の方々や市職員のみなさんがいつでも研

究に参加でき、研究所がその研究ノウハウを持ってサポートできる体制を構築することが求められていると、あらゆる方面からの声を通して強く感じています。企画調整室も研究所にそのような体制が取れるようにサポートしています。

市民の方々や市職員のみなさんによる自主的な研究活動を通じて政策形成の養成や個々人の視野と交流の範囲が拡大し、研究所を核にネットワークが生まれるようにどんどん研究所を活用していただきたいと思っています。また豊中市に政策提言を行う研究機関としての取り組みに大いに期待して、行政が驚くような政策提言を待っています。

理事会ダイジェスト 平成14年度がはじまりました

研究所の四季でもっとも重要な理事会が第1回は4月15日、第2回は6月24日に開催されました。第1回は人事異動に伴う新理事の紹介や13年度事業の経過概要の総括が行なわれ、第2回は今年度の研究計画と事業内容の審議を行い、そして来年度以降の研究所のあり方について議論を行ない10月までに更に検討し方向性を見出すことを確認しました。

理事会トピックス

表 彰 大久保昌一理事長 日本都市計画学会創設50周年を記念し設定された功績賞受賞
新 理 事 高垣正夫理事 豊中市政推進部長
所属変更 植田政孝理事 大阪市立大学 大阪産業大学
芦田英機理事 豊中市政推進部長 京都女子大学

本年度予算と前年度決算は次のとおりです。

14年度予算

13年度決算

(単位：千円)

14年度予算			13年度決算		
収入の部		備 考	収入の部		備 考
補助金	36,450	豊中市から	補助金	36,609	
繰越金等	14,419	H12,13 収支残額	繰越金等	18,245	
合 計	50,869		合 計	54,854	
支出の部			支出の部		
事業費	6,255	調査研究費他	事業費	5,093	
管理費	38,191	人件費	管理費	35,592	
調整基金	6,423	前年残額繰入	調整基金	7,746	
合 計	50,869		合 計	48,431	残額 6,423

事務局から

市役所の人事異動に伴いスタッフが代わりました

太原研究員が総務部に復帰異動し、土木部から土井が研究員として配属されました。

新大陸

研究所にこの4月からやって来ました。ここは毎日が驚きと発見があり、無限の資源が眠る宝庫です。しかしルールが無いところなので自分を見失うことなく開拓していきます。(土井)

早くも3年目

研究所に派遣されてはや2年が経過し、最古参の研究員となりました。進級試験を受けずに3年生になってしまった、というのが正直な心境です。3年という月日は1つの節目で、今年度の過ごし方が研究所での3年間を決定付けるように思います。「三年寝太郎」だったと言われないように気持ちを引き締めて頑張りますので、よろしくをお願いします。(村上)

頑固者？

以前勤めていた会社の上司から「君は頑固やからなあ」と言われた事があります。習い事をしてた時の先生からも親からも言われた事があるので、私はもしかすると頑固なのかもしれません。

しかし、良い意味にすると意志が強いと言う事だと思っています。研究所でも周りの方の迷惑にならない程度に意志を持って仕事に取り組んでいきたいです。(洲浜)

改革前夜

小泉改革のゆくえを危ぶむ話題が続く昨今ですが、研究所も改革に向けた議論を重ねています。気付いたところから変えて行こうと、このニュースレターも土井編集長の下、少しリニューアルしました。ご感想をぜひお寄せください。(平尾)

編集後記

世界の祭典といわれるサッカーワールドカップが閉会しました。日本代表はベスト16という成果をあげて今後の躍進が大いに期待される所です。サッカーというスポーツですが、組織力、個人能力、試合戦略そして先発メンバー人選など私たちが仕事を進めるのと同じような展開で試合に臨んでいることに気づきます。職場でもサッカーチームのように見立てて、いろいろな会話がなされたのではないのでしょうか？例えば「あいつは立場的にボランチなんやけれど、全くそんな役割をしてないで。」「うちの職場は監督がピッチの中を走り回ってる。」「やっぱり さんは司令塔だな。」とか職場をチームに置き換えると組織の特徴が見えてきます。ところで世界で戦うチームの監督はやはり日本人以外がよいのでしょうか？日本は外圧でしか変わらなかったという歴史が2度もあるのでよけいにそう思います。

最後になりましたが、今年このニュースレターの編集を行います。よろしくご挨拶致します。(土井)

気分も新たに

研究所は総勢6名の職場なので、1名入れ替わると全体の雰囲気も大分変わりました。昔、学習雑誌の中1時代か中1コースの宣伝で「中1キョロキョロ、中2ウロウロ、中3オロオロ」というフレーズがあったように記憶しています。研究所生活2年目になり、3年目にオロオロしないように目標を持って毎日を過していこうと思います(弘中)

過去・現在・未来

研究所が設立されて6年目を迎えます。たった4人での船出でした。設立に伴うさまざまな手続と日々の業務におわれた1年目。2年目からは職員も増員され、事業達成に向かって雨・嵐を乗り越え必死に舟を漕ぐ6人。ようやく軌道に乗り始めた現在。そして、新たな期待に不安を感じる未来。舟をうまく進めるにはチームワークが大切です。マイペースになりがちな現在、チームワークを大切に、目標に向かい進んで行きたいと思います。(水田)



